三

●こゝろゆくもの　詞うさのみ

よくこゝろえ女房のおほく奥おりうほぐ奥

くさまのやうにぐわて。おのこどもは

はらせてゐる。もろてきらびやかなる

うねのうきぬ着して文うつす。

着あるぬ着して文うつす。

二倍を一倍よ合よ高やかに

笑うほはきいろのこゐぜわしうる。

そぐろめのよくつさゝほ

文選註ニ云ク黒歯国在リ東海中ニ其ノ土俗皆ナ草深ク歯ニ故ニ曰ク歯ノ黒ト

そのめ人乃みのねたるや

陰陽師ノ相當従七位上

そのよもいをんやうじとて。ほそ咀咒

ぬりて出てずそはらへしる。

是ハ人ヨ職神ヲ祭ラヌ為ノ災難ヲ除ケ
ヤウト祝部（ハフリベ）ノ家ヨ周防ノ国ヨ参ルベシ
トアルヲ夢ノ告ゲトシテ祭ルナリ。イトアヤシム
ベキ事ニアラズ。サテ此ノ社ノ縁起ヲ見ルニ
人皇卅代敏達天皇ノ御宇ニ当国ノ国司
ノ門ノ内ニ一ツノ祠ヲ建テ祭リシヨリ
ソノ霊験アラタニシテ国中ノ人民ノ
願ヒ事ヲ祈リ叶ヘザルハナシ。
ソレヨリ代々ノ国司ノ崇敬浅カラズ
シテ社領ヲ寄附シ社殿ヲ造営シ
玉ヒシヨシ国史ニ見エタリ。
サテ此ノ社ノ神ハ

ノ祖ヲ祭ルトイヘドモ

ハ国司ノ祭ラレシヨリ

ヲ祭ルトモ云ヒツタヘタリ。

トモアレ此ノ社ノ神ハ

ノ

ヨリ

モ尾ノ

スエマデ。

綱代　藝之時召之下簾如常（ケノ）（スル）（レ）（ノ）上ハ白綱如半蔀（レ）（ツブ）之板大ハ葉
格物論ニ牛大牡数種赤亀曰駅（ハ）（ウ）（ト）（ナリ）（ウ）（ト）
亀曰犠牲雑曰騅（ウ）（ト）（ウ）（ト）

堆（ウ）（ト）
当ヲ

ノ

ヨリ

ヲ

ツヅケ

ル事ヲ

ヨリ

ト云ヒ

ヒ

木綿紙 そでのやうなみゆるを
ぎふゆふみといふはべし

鯛恒家集 ふるの尾や
恋すてふやせそすらめものをのゆふぐくおもふゆる
牧 赤白髪 廉こまつとも
うしろえをおきそ。みあらこらぐそ。ぐらのあみくかをぐ
しぎふる。 ばふーさずいぞんを。ぱそやうるらさおのこも狩
わうさぞ。さ(ほ)ふるぞ。ふるぞらぞ。ねみるうん
人とおもふ。

職原抄 雑色 良家子補之 禁秘抄本負数八人代々皆猶
蔵人仍公卿子孫又任諸大夫補之 亜為諸院司判官
代 蔵人不云指貫只袴 勅使 東鑑治承廿四年時

澤為雑色 長日時分時沢参自京都為治使下遠参
侍の宮まで仕使をはぶむはや 随身八年一巻ま記
小舎人をちいさるそ。みのうほはぶ良やよとも心や
うそ。ぱこあるものるどいひさほぞ。ぶやりくしき。

職原抄 小舎人古人近代十二人 牛車東白張狩衣主馬帽子
殿上人之出門は舎人引之自二条院時如
ねこはうしの乃かざあろるそ。あるこ異まの前
よさ。遠呪れるを面ほうへるそ。そのとくるれあうとるる

おぢゆまひがめーつまで。おそ（悪）ろふ。まくげのろそつみやうんと
なげめ。ばちゆき（地ゆきの事）ばのうみゆきは（雪）ばとどむべしす（須）
ゑやう（様）ん冠（形のびく）ゑ（老）ことのどをくる心おそろ
又ゑうとくさる（講師ヲテラム心ナラス説法ノ間ニゆでゐれうとまつげど）人てう。ねこのつみのこころよ。ちもわるでゆれ。（若ま）
人を。しーへばせんぎ（快楽の時ゐるまで前証すること）ゐやざもせばそのどーばの（悪人の）
所てうげもみくさもわるざめる。（悪人ヲリテ人ヲ害スルモノヲ云）ゑ（悪人の職ヲもる時計ゐぢうつつ）ともいそぐうつど。（悪人の心）
わるころですべんめど。

六法（ジュウ）ゑ人四ケ（ジュウ）の（悪人也）ゑ（罪）ん（ジュウ）とそれ
わるでや。職（ショク）ゐ（家初）五法ゑ人唐名仙郎。五法ゑ人中名
家譜（フ）ゐ（ニ）捕（シテ）甚（ハナハダ）ゐ（ニ）用（モチユ）被捕（ルミセ）や。中罪（ジュウ）ゑ（罪）及五法ゑ人必聴（ユルサレ）
禁（ジン）ず（ズ）

説法（ほうの話）さやのみて。ひるでもみてつびを（悪人五位）ゐ（ニ）つめてほうで
まぐ（ろうなりて。つつのどのいるあつさ（あつき暑気ニモ聴ズ）ともでうとくさやる。
りすゐあ。まゐぶのけーめてさ（ノキ）どふみちーてゐ（ニ）ゐり
兄（ニ）ゐ（ニ）悪者（ニ）ゐ（ニ）ゐ（ニ）田（ノキ）淡（ン）名（ン）又まえぎのろろり
ろぐよものいみはそるを

物尽という字を出して。おそれおびえ、門を閉ざ
みすの間よりものをはく。
迦毘羅衛中有桃林其中有一大鬼王号物忌其鬼王辺他
鬼神曾以不得意彼大鬼神王発誓願云利益ノ趣有
情寃吾名号人宅物怪屢現悪夢頻示可家諸ノ害時
臨其日書吾名門立其故他鬼神不令来入亦書吾名入
持人ノ如影可入ト守護ト
その忌ものの忌ものの忌ものの

号声ハおくさうのせせみの和らすき衣ハこちそそてろろ
ぬき

お要ス法ル多数ニ多 き
十五歳 中納言大納言(コキ)流ぶ流ぶ多 十七歳 大納言為久卿(カタモン)領物
十八歳 同宰相多後同周久 廿一歳 左大ト 陸奥守
廿七歳 多白真衣(ハ)ぬ流多望領物

歩行 すーのひとへなどこそ流もろぐさぬすぐさまてをさやうこのてのそ。
わろろやろるろ三四人ばかり(サンシ)侍(さぶらひ)ども。さみろれのものの。まさにバくわーて
おれどばかりよぬおつくんもすーうち身ごろくさろぐく。
早く詣(まゐ)ん人の時宜乃躰 退座 罪(つみ)
かうざのもちろさはらのもろろとるどよすくてれどさすごみおし

念珠を
もみなーてみ おごみ関おさ流をや。諫師(ゆしもし)もけくくしうおもろべし。
(いふもも)私法をろろつさおぶやすさと説の也 生(うま)ほなわ。ちやうもんすみやもちさ
いうでかろおはふるばろとそさ生(うま)
礼拝也 聴聞するものの(説法の)
そぐさぬろづろはぶろもろてぶろいばりて。車どもの
衣の三四の者他の車を乃(の)をこぬや (くるまの)
くろるぶ乃おこやくやれどろいみろ
さ流人をどれろーとおもし。乃(の)ーくおやや
目をはろてをおもいやぬろそおりくれ。(逸真(いつしん)ぶれの心)
人乃(の)それはふるよ。ろの人(ひと)ハあり(そんでこそのくもと)
さ流あまものわ。(説法の場よ受ケ下る衆(しゅ)ぬいくよも)おぶろハむげよ流(ぬ)のぞうでいあろむ。ほやーさやそ。
いみじろ(説法を)同めるりのをばさんじばとそ (句(く)) さろとて(世の事あまむりいろろそぶーみて(あるいろいしとも)
人をるるまよ。(邂逅(かいこう)) 同(おな)さうよハつぶれろぐくるぶあーて。

後成郷の女(イチメ)説は市女笠などぬきて中ゆひなどをかし

化粧
みつめくさけしうじてそおもしろそ

男女九人の集ル説ほの場六女のうちそこニテ八人うちとしとや
などをもとかおもしろくさゞばりくさ。ここのでろそろうさ女房人のいのち

男女ものゝこゝぬを誹諧せんともや
るぐくてみものゝ。いろばもそうひろ

結縁
ぐさをいふ寺よけうらん八かうせ

菩提樹院や　拾芥よ　神ふ岳のむぐ(ヨカ)ーが

法経や今八雀鳴もをかし

八講のゟ　元亨釈書勤操傳云　初操居大安寺(ニ)隣房(ニ)有栄
好者(トスノ)養(フ)老母於寺(ニ)側(ト)操與好善常(ニ)見(ル)之貴(フカ)好之篤(トクス)考也好
已殂(ニユキヌ)矣操潜葬(ル)好(ノ)于野(ニ)蓋(レ)訝(テ)好之母有(テ)問也使(メテ)童(ハセ)謂人(ニ)ヲ

吾師佗(ニカ)之次日操飯(ツヅ)分猶好(ノ)之為母閔(テ)之慟絶不起操大嘆乃
并同志七人葬(ル)好母於岩渕寺後操及七人又寺(ニ)操語云吾代(テ)
栄好養(フ)其母養不父(ヨカ)命已断未足(テ)酬好欲厲(スメテ)貧福補(フ)養我
等八人分法華八巻逢(フ)嫗忌各講一巻(ヲ)為追福(ト)公等(ラ)詣(テ)否
七人皆諾設(テ)四日二座講席(ヲ)修之名曰法華八講會(ト)于時延
暦十五年也毎年不缺諸寺名岩渕(ノ)八講(ト)会
清少の夫(ヲ)のこと
清少の
きてよまうでこゝろ〳〵人のもとゝゆきへ〳〵そちうぐし
とうもろこしぱちすのそをびうち。
英
清少の家集ニ(ヨリ)千載集ニ入タリ
もゝあてこゝろぐらすのそをあてそうさ世よ又ハ人ものは
清少心
とゝさてやり川。泥よいをもあゝれぐれ。ほゞてとゝものめべ

渇世の俗中八立退(カ)ほまりとや、
通夜せんとも

うぞおぼゆる。（経任）ほどもあうず家のものどもさもわるべし。

小白川といふ所。小一条のおほ臣（昭憲公也）の家なり。そこにて上達部
法師の八講しまうでいみじう行ひてあつまり給へり。

寛和二年の六月中旬の八講をしや（行ふ）その廿日
餘の中納言（よりつね）なくなりたまへる。悲しきかぎりなり。
和二年六月廿日よ。七山院の出給ひて出家せ給ひ
夢のごとのおぼゆるを六月十日なりや
をとうと東へよるべきやうもなきものをとぞ。後のとぢめとおぼえて。

すきゆく車のある躰也　轅（ながえ）うへの首より下悪
おほかた陰のかぎりなる。なぐさめ（慰）の
三つ重のおりふせて八講も（同ゆふとも）　車二輌
でそすこしものをきこゆべし。六月十ら日よりあつさ（暑）のせめ
しぬなどや。（清少納言）此のそらすをも見や。所のこそ。すこしもどしきこころ
すう。左右（さう）のおとどうちを忠（ただ）
この不乃左右の太ト（ふとのさうのふとのおとど）
のせうそこ。左太ト（さふとのおとど）四二位源雅信　左大ト（さふとのおとど）四二位為家
ふるの（是ヨリ始東ノ三ノ巻ニ）
みるめのの後し所あるさ。おさぎのうへ（惟子の直衣のすきま透と給ふや）（沙黄）
おうこ（老）おとうび紅一所。あ給ふびのしめさまうさけつまる。
すべしげるもや。　元数の兎狩の駄帝ニ参ス

（ソノ左）若狭下野守（フコ）将ホ泛（クミ）くるまの（若きくとおもひやる寛和二年の比五十七歳也）やどりの宰相なども（八講のあるときまうでくるおりの居るまうと所勢ひのさまの見ゆ）わりなくおりしきものえや

藤氏系口云（ニク）　参議正三位安親　中納言山蔭孫従四位上
播津守伊陟三男也　母ヲ伊勢ヲ源友貞のめや（ムスメ）長徳二年三
月六日卒（ニス）六十七歳
職ヲ補任（ニク）一條院蔵人ニ安（サ）泛（ミ）泛四位上蔵人安親寛和二
年六月廿三日補（セラル）前坊（ノスケニ）亮永延元年十一月十一日任（ス）系後ニ
（廂ろんぐのひさし）簀（長押上ぐんの心也）高（居るのうびろや）捴てながくとおさまりなのかそ。なげーのうへよ達（ヒ）部おりもいてながくとおさまりなのかそ。廂上人わりさうな（狩衣）生。

うぐひすの（吟）ねもさへうらうらとなりぬるをいとおもしろ
うぐひすのさへづるをきゝてよめる
藤家譜云　小一条左大臣師尹子大将貞時乃息左中将
（長朋未考）
敦実方也母ハ左大ド源雅（サブ）信ノ雅（サブ）信のめや
ながめつゝ（ハ講ノとちうもうち出（イ）つるかなまぎれつゝ（小条のまゝそいぬすう）
つるの公達（ハおとゝせうとうちうち道隆ハおとゝせうとうち）などいとおほかり
とそ関白殿もそ関し。
中関白道隆公也大入ヲ慕家公の男母ハ按津守伊陟女
天暦七年生（ル）康保四年後五位下同十二月昇（セウ）殿（デン）也山（ノ）院永
観二年正月七日未（ノ）剋泛（ミ）泛一条院永祚二年五月一日

（ヨツヅノメル）記図ある関白十三日ある氏長者同廿六日更今（イマノ）将（ショウ）軍（グン）家（ケ）ノ摂（セッ）政（ショウ）ノ勝日（ショウニチ）候（ソウロウ）大将（ショウ）同（ドウ）官（カン）ノ宣旨（センジ）ヲ賜（タマワ）ハリ随身（ズイシン）内（ウチ）々（ウチ）ノ参（マイ）入（リ）ス人（ヒト）々（ビト）ハ公（キン）卿（ケイ）二人（ニン）殿上人（テンジョウビト）六（ロク）人（ニン）ト記（シル）サレ（ユルサレ）ギ（ズ）ヤウ（ヨウ）ニ（ニ）ハ（ハ）車（クルマ）ニ（ニ）ハ（ハ）乗（ノ）ラ（ラ）ス（ス）

香羅

かうのうすものゝふたあはせのひとへ

濃蕪芳

のはもうへもうすこしうすくこきさひとつよりあはせのもの（かさねのいろめ上下連部のすゝしき衣裳の中ニ上ノ上達部ノスゝシキ衣裳ノ中ニ）ひてあはみ人のもつる。さゞらびすゞ（細塗骨）

道隆ヲほめて也

みなどいみじう給ひてあるしとみをそ

（地祇ハ同上也）

（並）

くちのくちなどいみじうさゝみをおろしてあるに

扇ヲタヽエタルヤ

あてなるにほひいみじうさゝれたるに

（懸盤）

（居直ヘ）

のどやかにうけたまはりなをりたるこそ

（腸ヤ）

いとあはれなるものなれ。

山ゐでのうち出家しおはしたるところ也

よもぎの中納言の御ありさまなどはねもとよりきりたおしたる

さまでかまへたるおぼえや

藤氏家譜云九條右丞相師輔（吉子）乃孫讃濃公伊尹（ただ）子（ちゝ）家懐

母代明親王（ハヨシアキラ）女

公卿補任云為指貫大臣伊尹子母者中務卿具平（ともひら）親王（ノ）女（ムスメ）天禄三年（サンネン）正月七日従五位下（ジュゴイノゲ）叙二（ニ）爵（シャク）ス

従二位（ジュニイ）花山院（クワザンイン）寛和二年（ニネン）権（ゴン）中納言（チュウナゴン）従二（ジュニ）位（イ）同六月廿四日（ニチ）於（ニ）

山（ヤマ）家（イヘ）ニ（ニ）出家（シュッケ）ス（ス）法名悟（ゴ）真（シン）行（ギョウ）年（トシ）廿（ハタチ）歳（サイ）受戒（ジュカイ）ス（ス）

弘（コウ）五（ゴ）年（ネン）七月十七日五十二歳（サイ）ニ（ニ）テ（テ）逝（ユキ）去（サリ）ス

かくてみな一条摂政の出おはしぬるのち花山院乃出御帝のおはしぬ

りてうちの中納言と同車しおはしたり。
をちの尼君いみじうはづかしがりしやぎ紅ひしみづ出家せさせ給ひ
しかばやがてわれもおもれをすてじと。飯室
一日そざめてほしょ紅ひきぬぐいむちとよおよいてあるうえ
おとのいてぞくれ紅ひ一その中納言もむはごるをおいせ
ぐぴ浴こころもあるぬいとかくおはして。山院のほけ乃
ゆつどもを。あこの屋と住成の女とくおぐ紅ひぬぐ。
地
上達部乃酒名をやこのべきもあるぬをぬれなうくんとすう
いみじうをかしし
上達部の衣装の
向うあれがいこ
かぜあおぐ。
鮮こ
あぎやよいづれとをかき

上達部の
もっくし多こ六賞金をとむもも
やをぬくんおうくんのちょまさぬ
ちゃてこころをんぶいて。
よちうの
女車のこづつ
ちょうの
口上を
そいはべくむものひうやをめせぐ。
実方の口上くいつきものをつれもてあるわと
出おりしぬよ。ぐそいやはべ
清少のもと
せくぴうのくんさを紫をまきこうぼいみじをうをいしてうる
使の
をとをあゆみちほをぴつをわくちうひ紅ひちわちくちうひて
使のものみまうてぐ。
えいたしをもあてぐぴ。ぶうぐちむ
儲
ほうけうぬどわこいていぴゆうぬ

（この立蔀乃方ヲ）
あぢきなくそおもほさるゝ
（屏越ニ見奉ル人ヲ怪シミテ）
（ケヒラフノ人ノ）
こゝろもおくうあわしとぞ
（この女車ノ）
（使ノ）
ゐ。扇をうちならしてよびいだせば
（使ヲ呼ビ出ス清少心也）
（誤）
（文字）
（清少の不足あるともあれどもと使の給へるをあしくとる清少心）
ばかりそらびこえさめ。そのほどのまどをいとむやうにくく
（直さずともあれどもの心）
すぐきよもあらじものをぞ。
（その使ヲ待ツ程ヤ）
（道隆）
もとのくぢふくとゝれもらしたまへ。三位の中将
（よりちかのことゝもにて）
（使ヲ）
さへぞそゝのかしてまゐりたまひぬる。
（ケンレン心アリテ真ヲ書サセンとの心）
（清少の方ヘ）
有心すべくもあらぬをのこどもの
（勝也）
（車ヲ使ノ方ヲ）
ものいひかけなどするをぞ。
（ケヒラフノ人ノ）
いでいとつれなのものまもりどもや。

動物ニ乞ハル為光七月廿日右大将ヲ宮十五
公卿補任ニ云ク右大臣師輔公九男母延喜第九女前、敦実四
品権子内親王ヲ妻ス五ヲ生ム（ル）ヲ曆十一ヲ四月七日従五位
下ニ叙ス元二ヲ四月廿日任（ス）権中納言ニ寛和二ヲ七月廿日
右大臣永延二ヲ従二位ニ曆二ヲ九月廿日ヲ以テ大臣ニ同
三年六月十六日薨（コウス）ヲ五十五（ル）移葬（テ）ニ法住寺ニ贈ニ一位（ヲ）恒（ツネ）
徳公封相摸国（ノ）ニ
使のある間に
三位中将のもとなる御文をもてきたり。
（すゞろまめやかにおもひ給へわたるさまに真ヲ書ケルヲ）
（ニ）
（ノ）
（ヲ）
（ヲ）
（ヲ

使の迎
面白きとぞ紅へど。そは（うつくしきをいふ）
ばかりねぢけ（ねぢけたるをいふ）ざま（ここの事をいふ）にあらんとてくつまで行くをぞ（ここの事をいふ）とぞ
らんぷ（ちらちらの）もわらやなどのさまよ。談咄（八講の方言）のなどかはまでぞ。
すれど。（女童へ）ふはぢめ（あそこらをいふ）おとみ（上署）
織（車の幌）ものすぢのうちものう（居定）
やがてひろげ（清少の心也）ぐらゐかけ（女車ハ消ち女ともよめるぬ）人のうち（車の騎）
おきと同じて申くいとぞおぼゆるあぢの講師せいそん

延喜式細流（あるより別に流れ来るのすそ）

國俊道徳の評勝れる躰也
言寔（ことも）ぞみちくしてぞみじきである
動物ニ（ク）云 清範（ハ）法相宗（ノ）播广岡人（ニ）男（ス）法（ノ）律師（ト）長徳二年
擅律師
東塞（サイズイ）隨筆（ニ）云清範律師を。播广の国乃人。興福寺乃
法相宗也（クワイ）晴修都の法孫。守朝の授法上手也。法法毎朝
して文珠の化身といひる。ゆゑぎるるあぢそうぢ
法（ノ）門堂入道屠（ビツ）言（ハ）を知る面つんとして。行るを陪しく。
百座も語ぜうる。修ち産（ウ）るを皆ま要をもうもの。
ひとのまうる。文珠と云ふ事あぢ我るの中よりくして。
百座よもさを面らへこの律師我産をゆるしてぐるくる

仮書をのよう産ずれあ。そのち史定文殊の化身
とをあ紗姫。供いよって迷化活ぶるの上綱と号せ
大鏡よ 活犯律師いぬのめりぶるしくる人の海
師よ語ぜるく紗を。活脳律師あるでさあ仮活
者のれて。ぐするとき聖哭を蓮華乃うへまく
駈図しくぶぐあぐやる会聖哭を蓮華乃うへまく
ほどあを紗姫んとのさひるをぱぶぐそるとを人を
うをおもひるまぐやの紙やのあるあるぱぐ
ぶるるそうとしてそかめひるま。
六十二代村上のた時活潅座まて面也のあ通二十人を結

し寛和二年四月廿一日より五日午後の法講あり

初日朝座講師南都観理

夕座講師南京安鏡

二日朝導(ダウハ)一南都安秀

夕座(ハ)一南京法蔵

三日朝導(ダウハ)者北京良源

夕座(ハ)一北嶺禅愉(ユ)

四日朝講(カウジ)一三井智興

夕座(ハ)者南京港然(タンネン)

五日朝導(ダウハ)天台(テンダイ)寿肇(ジュテウ)

問者園城慶祚(モンシヤ)

難者北京慈恵(ナン)

問者北嶺賀秀

難者天台覚慶

問者南都平州

難者南京千到(タウ)

問者南都真義

難者北嶺崇尊(ソンガン)

疑者法宗仲等(ギ)

夕座講師天台聖教
問者法宗圓藪

くまでも記録よある法報の名ざ漢師はと名づれし
次第も記録よりの人まるやや未考
暑
あはさ乃わびしさよそ人るゑ。ゑさすあじ
清少の用るとやゝ
うちをそてぐもぐすこ図てくわるんとゝ
講
卑ちおくよるんわるれぐいばべさりくさも似
清少
出ゐんとくぬへるるくる雨ごまもせうそ
出用ゑこのあんるの
ぬ
清少の車ノ
やぐくと引出あそていぐをこんの
上達部うど
清ノ
老
う。おいんぐちあ広へわくひまむを。図もいれぐ。いくもせぐ。ぜぐぐを
退出スルモ与ゑこゝ
いづまぐ。控ず殊ゑ石あるめるもちそぐうわくひあさ広ぐめで
清少ヨリ
あくぐぐもみよもとゆぐ。暑ゑこ
人くてまる人ゆ中ゑもいるせるぬやうを
五ゑ人法なの左ノ五ゑその中二そのも入行りんと
方便品曰尒時世尊告舍利弗汝已慇懃三請豈得不說
汝今諦聽善思念之吾當為汝分別解說是語時會
中有比丘尼優婆塞優婆夷五千人等即從座起礼
拜佛而退所以者何此輩罪根深重及増上慢未得謂得
未證謂證有如是失是以不住
是又よの車
講
そのはぢめうわ。やぐくとつるほよありくろが。人
実の永とゑみぐぐとゑの音つまぬ心ゑ
うとゑ心や一ぶまのる心や
よあるとゑをみぐぐほるすぢくあさ。法ぐのやうそそ
清少の
名ぐぐ。あのぐくめぐであるとゑ。いりる人るんぐぐもう
初中後のあをてぐめてあいぐをゑ
もとそいくゑを図さいて。荷光
ゑるよりめぐであいんいをる

死人図おののきふしくるまでものよそをあるれとのさまひくるそおりくるまで
さてその廿日ばかりよ井納言(ヨリナ)ちかよ成紗(ナリ)ひめをとて給ふ
栄花もの語よ 寛和二年六月廿二日の祇候(ミキ)のう舟
あひめとのくるうちうちのそうの局上人上達(ノボリ)部あやし
の漆仕(ジテ)てよりそうでおほくをとりていそうぬ
くさもおるそうとめをまよゆめおりくさぞそぞ
惟成の弁(ジ)ふるでひふるそそこ月もはぐらく
あるふ。ふはしよてつひいる仏せめ一所ものおほくるのやいそ
しやとそこふおまろびて中納言もはしよなの紗ひぬ。
惟成の弁もの紗ひぬあさまよう御ぞうあられり

生絹
すゝしうそうのあのおひいるそうもの(腰のひもを)
の袴(ハカマ)ねもすばぬや(ゆふくるまでにも)(その女房のみのさまれわざこそ)
こけおそうおめ。そぞのそうみ
(他のおとゝの外もの袴さまでも)
うなどぞさをそそうれそうそうのおとゝ(元)
のいとう寒みそうにふそ(その女房のみのさまれわざこそ)
そうぞめのうざぬ。白きすゝしのそうあのすさまじゆゑなるもの
をそうのそこまそうおのとそうをあそうぬぞや
(ゆるくとおそうさま駄)
(おとゝけそうさま迄や)
おぐみそうぐ。ぞぐのをし
(四度解ず)
ひとゆぞおそうぶ乃寒おらぬまでいわそうまでふそうさまもとゞけしおく
(指貫の文)(ふくさの袴や)
こそもとおくぞおふのトまるおしおそうぐみそうのかく
(寿)(おとゝの方へや)
まるおぐぞうちずさみくぞうそうよ
万(人衆)
梅麻呂おのトまるおしおそうぐみそうのかく

仙えおよ 楊麻とをさうろ
この苧高き格子や 麻や おやのうろ下駄の音
かうしのおくそ ぴ みをのそぐ紙い
他のおとこや おやこ
む人もおりぴつ 亟をおれとをみよや
我妻を名とうちすさびりぐいよく人もあれとをそ
旬ふ笑ろをけうろおぐさひろぐ
妻成 おやの
そうぐみのほそやうをぴ ばみうろ
なむ
あるも。ぴ恨のもよちぐひうろ人の面はひわれぐ。
清サガ
たつの
ふ西郭みろいゆしまろ
ふのものおぐの中より
おやこの
きぬの中おひゆうり。うろそてなぐ
隠心の内
ばぐおぐするへをうねぐ。うろ
如ここのおとこをろわる家技術
そぴうろもみをめうろ。
異詞なのか
おやこの半身
蘆
をて。すのうろよおうろばろ入うわ
さま我ぐく知れくしくすとや
ーさふをいる。おりまうるおろ
うちすあーこぐもまうろぐるる松ぐ
及うわそや
ーて。おうぐびてうさよすうが。おもを
おやこの
めさせうわくぴうぐうろ。
おやこの
うまうぐうろみるどすうふ。あ
日九よけし駄や
ぴうなうろ。人のこふぐ日芸
この女とくらおて住おのふ九点引を落をむもや
ぬめし。雰のうてよみ
おやこの
めうそ。うーろめうれ。ぬめうろ
みをいつの西まうろうろひーをや
ろぐこのおのぐろおうりつてそ
いまぐうろめうる旬もいをおとし
笑者や 詠ろをまおさ出ーへのまと
扇をおとこの
扇
及うわそや
のひろうと所扇を 女の空
おやこの
扇をおとこの
おやこれうみの旬
女の引入てとうう所駄や
ぴうぐうろ。
いまうろうへの心をはうろて
香
秋明白て雨をゆれいや
おうりはーめおうろぐふ

その子を（の扇をおれてこ）
のこれもこの神一女のもとにもくめんと清水うおもひくや
おりわめべし。

●木の花を

詹

あやき恋
あやにくもうすきもお梅。さそふ（こゝろにくゝさゝる）
ほそうれもりさきさき。
はちすおいをめでゝし。うすの花のうつろひやすき
うほとぐひのこのごとくかく
新古
あくまでせえやはらのいぬなこそ花のかげよりて人を
梨子の
香のうへさうぎ梨野のわうちこうまあやし（いやしき）
ち家どもおどろかす（前棘）
りさねりへやもろうはちすおりくん。

栄野そい西宝大濠寺ほうを皆栄野といふや
西紙名のうへ白きふおのなり白きふへのさねりづさ（被）西。まくらぶとうもの（仰臥）うもてあそ

青麦（まぎ）麹塵や前よ（ク）番ー　覚悟おは書行蒙（多六首）書冊子
ほの裏書ー老者多墨（クス）田五月のまや
西ぱちはぐまぱ月のはいてちぐめ
をさきり。ものをおさきまさほり（最と早朝の心）
そよふのくこうあるさ西りおりー。ものの中（もゝべの中は黄金の色あり）おこがねのあ西りて
みていみじもあぎやるみてふれさほ梅り
をもぐぶ。名つ梅よめれさほ梅り
（ど信也）
ぱへおもぐりやぱ紙ぱるいぐまー

いんやうもおもひ心也
もあらじ

枝中書王猫の詩ふ

校書金鈴雀雨及花薫麝鎖風荘

我やどのもゝくさみだれて人も訪ぬ
あやしきまでにしのぶかな

あの花もゝくさ（もゝそなさま也）すさまじ（あやしき心也）
うつるさへはけおほし（愛敬也）

壁也
あをによしなら（只白クシテスゲナキ心也）のみやこのかさしにさせる
いろ（詩文也）
やうなるもゝくさ（もゝそこ）

李白　梨花白雪香

東坡　梨花淡白柳深青　柳絮飛時花満城

表ニ　此花開処擅ニ美名ヲ一

このかきねのはなよ詩文あまたあるべし
施
はるのびのはなよ（すこしきの心也）
楊貴妃　玄宗皇帝　逢莱ノ使方士
楊貴妃をこひ給ひて方士をあつめてたづねさせ給ふ
玄宗の御使方士
うめでさくらもゝくさ
楊貴妃　弘農楊玄琰ガ女也
のあやめ杜子美詩
ぼたん
玉容寂寞涙闌干梨花一枝春帯雨　白樂天長恨歌

桐の名第一ならざるにあらずや。桐のめでたきこと。柔のめでたきこと。木ども皆をとるべきにあらず

本草綱目三十五 桐樹有四種 青桐梧桐白桐一名椅桐
與崗桐無異但有花子二月開花黄紫
周書清明之日桐始華(桐乃鳳凰也)歳有大寒
あらざるをくしさをつくしてこれをのぞむ
をやしらざるをや

韓詩外傳鳳備五采高四五尺翱翔四海天下有道則見翼若
竽其色若簧不啄生虫不折生草不群居不侶行不梧桐不宿
非竹實不食非醴泉不飲

まいて琴をはやてさまでくまなき音乃出くるをおやとやいふべくやはいはまいみじうこそはめでたけれ

柏家元琴ノ序 琴ハ莫良於桐桐ハ莫良於生石
琴のもとの絃十二ことといひて弦のみつを計るゆと
いふ。第一を仁といふ。第十を南とふその中八乃名をつくるやを
いでゝも人の秘するものとそ。ふるしやもとの琴の緒ハ
十二や 阮陽箏賦云箏長六尺。應律數絃有十二象四時。
柱高三寸象三才傳古箏賦絃柱擬象十二月。そをを箏の柱
洞ありてそこんやとて一絃をとりはづしてハ琴ハ禁やと解して郭舎を飛

ぐめて人のこころもおもむくをとゞめ
そのや是則白虎通乃心や
水のさゆぞよくぐるなどあるもいとおもしろし。
ほさてゞるのくびる月日もあるもおりし
荘子云有大木人謂之樗其木擁腫不中繩木小枚曲拳不中
規矩也證類本草五月五日俗人取樗葉佩之避悪気云
和名抄云阿布知

●池ハ
つゝみどころの池
神中抄云このはまぢの池とゝ人とゝ家低の園とおもへ夢ともよ

則ゝの国よりつまさ乃温泉湧ぬ。その石ゝ結固ゞ奇秘よ。結ぶ
低あるを入ゝ。松ふ審なりみ。
古民よもでしゝぞ。さ池あるとものあるまゝ。
人のこゝろつまさ乃池ハ。ゝゝ乃東茶河寺ゝあゝ。
膝股乃池ハ秋ゝ落ちすゝあゝ。
良ゝ集まゝへまゝるゝ。
ばゝみゝるふ。

大和磐余
いゝれの池
おゝてゝるい井ふゝもせこのつまさ乃むゝ池とゝあれゝもゝ
同州磐野
みゝのゝ池ハつゝせへまゝ
泊瀬
さゝぐさしゞいゝをおゝをみゝーまゝ

魚禹を執乃供物とすれど池の
大和 小泉の池。おやしう(奇異也)うるはしくはけるかんせいそしーつじ。ふかみ
すごて雨いめもふらむとすれやうーを。この池よみをふかめん
早魃 あろ。まさいうてほべきやうーを。まのはぢめよみるかん
(池のあるべきやうを水のこころもいかゝ也) おほそ
いづるいひやぎよ。(すべて水をくゝるこゝろをさとせる也) ぐてさもはあらん。
水の 出ほおもあるを雨を。をとすぢよは帝(奈良)へほうあやいくへほがりし。
大和 さほさいの池。宋女 うねめの子をあぐるれ。帝の きめーてみゆさなどを
(寵愛髪) くんこそいみーう先でありれ。わこてまれぐみをと人まろぐうみ
あむなど。いふもおろうな

大和ものがたるむーかしの帝とつうねつる宮女ありけり。か

(心をうごかすこと) くらづかうればもあはざるあり。
甚あぬ心。帝を限あるめでるさまのよんおひをなるみだを
めてのちまうもめぢうれど限あくこころうしとおもひうる。
らほひる心よりて。おぢくれて。帝はさはおぼさずぶ
言ふ己をれでの給せよあるべき中もあるまでみそ
くり出てさほはいの池うるの身をあぐてぐる。帝はうくもろうし
めぢぐうくをる。れついでまよ人のそうーくれぐ関しめて。
いとあうあれぐる行ひそ。池ろをよれまーのれ。人くま
言ふ雨せのひうる時ぐ人鬼がらめる
脇毎ろねてまうこさほはいの池ろをりとみうそうのうさ

やらあるけみど

猿沢の池もつくしとやきもの
思考みゆきー行如帝 あめの帝 天智天皇 又
聖武天皇とゝも云ふ。天智天皇をあめの帝と申ハ。位淳
天命開別 キノヒラカス 天皇と申せしゆへなや。聖武の淳譲ハ天璽 ノキヨキ 押開 レキ
豊桜彦 トヨ 天皇也又あめの帝よおハせし故天塚の帝とも
ふや。 古今序ニ平城天皇 ミヤトノメノ 詔侍臣令撰 ムレ 万葉集 ハ とあるを
仙覚のおよ聖武天皇と定めぬ又二条家よりあの帝を
又武帝とも申ゆるよ細あ
人丸の多敷光卿人麿呂賛仕 ヨシ 拍縄又武聖 ヨシ 勅遇 メ 新

田宮 チノ 市之皇子 ニシテ 大夫姓 ハ 柿本名ハ人麿
万葉廿二柿本人麿在石見国 リ 浜 ニクダ 泥 ニ 自傷 ナル 二首
人丸忌日 三月十八日と 續 ヨシ 日本紀にあり
人丸塚ハ三ヶ塚とそあるや長門ニ一ヶ所あるや
の説あるや

上列の前
おもへ乃池。まことふのこゝろよりくだる池のみづとゝもおもへ乃池。
さ屋田の池。みづとゝもの水ハ引ハあますか無やあますか
狭山 ヲ 数寄ま武蔵一説ハ 濃州 ぐみ乃池
高 むらさめの池。さやまの池のみづとゝもおもへ乃池
夫木 さや田ま原池の三稜草乃ねもころ人の原ま

参考
あひぬまの池　野州　莫苅
風俗上野の国
ヲ志多加部。加毛伎ヘ戸支井留。波良乃伊久乃。多万毛波
万祢奈加利曽。於比毛須加祢也。万祢奈加利曽。
和州益田
ほその池　ほその池は益田の池なるべし。
節供也
●せちゑ
五月ふつか　ちまき
拾芥云ク五月五日ヲ賀宴蓂ヲ蒲ヲ
歳時記云ク午日楚人採艾懸ル於戸上ニ以攘ル毒氣ヲ
九重のうちをはじめて　人のめやしき定
ゆかしとおもふころ。　五月ばかりの天会気也
ながき日もくらしかねたり。　后定の方也
ほくすぐ　ほくすぐと多くの糸をとりみだしてあるをいふ。　活帳して
あやめのはらふ　身屋ともに延衣式云ク
職原　縫殿寮頭一人掌ル女工及内外命婦宮人名帳考課
及裁縫衣服之事ヲ　第四の巻なり
活帳　衣桁のやうなるものにぬをとりつけるものや
舟屋　ふねの形なるべし。あごびれよりあごすぼまりにおほふ屋や

西宮記ニ糸而獻藥玉二流ヲ送諸寺藏人所ニ結付ケ母屋南
北柱ニ

九月九日の菊をあやとすしのさぬきつゝみくゝまるせて房。おるに
菓子の一枝也 綾 生絹
ばらふくろいれたりて見ごろあるくすぐ面ら(菊也)へてすつめて
その根添 九月九日ハ菊もの葉紅ひるや。是をも
陽の葉とやいむ。天子百度ニ出御なりて節會おこなふ。
又拜ありて菊酒を始ふる。おりて五日の節ニ同し。古帳の即
方ニ菜菓(グヒ)のものをけ。又菜菓ヲ
房(オ)ニて引ふ作りとゝめ。悪事をとゝめいふ。又ひの。昔
費長房ハ仙人ニ逃(ノガ)菊の枳(クミ)景(ケイ)よりおりて云。九月九日ハ

家ニわざわひあるべし。菜菓乃ものをめひて賀よりけ。
山のぼりて。菊酒をのめば。この災ゆるしと申されば。
月よおりてをしへのごとくせしに。その夕ハほどなく家
中九郎太ふかゝりおりの多くを菊酒をのむをそれ
ぬ。

まゝ菜菓ハ面もこ菊のおよでであらべきやあらむ。
菓子面ニ(菊也)ちらし(菊の葉也)
重ねひきて。ものゆひなどして。(五月の節供也)
人ゝにたまふ。ちまき(刺楓ニ菖蒲をさゝれ也)
(サバラ)俵ふみ ひげもあうばかりなり
面の註よりさいはひすくなりやとある

物忌
ものいとはやおごりてさはぐらさめ　背衣　汗衫
らさぬをおのおのまめごとぬりぎぬ
かさみ衣着のらさはうすきものや
らさぬを着をきはそもよりはかさみを上着の
さはものぞ。
あやめ
ねぐさ根おろき杖どもむしぐさのらく　組帯　村濃
（古事のるあらしさるるるなどもや清少ら早さの詞や）
重ねめづらしういとさるものらねどいと
大くさや
とてさらをよろしうもよ人やをあれ
よろぐさはぬを
うはそてをいうぐきわざとはおとひてはねよもりを雨こそ。
人くりかくべくもいぐ雨うあめとおを

わくへねぐさ根おろき杖どもむしぐさのらく　童の袖をふつけ海
（根）
ぬうぬのうはそてさはきて引ゆひまつ
（艶）
えむしぐさ根おやくのむといもあいせうら
一人のむすめ五人ぐるまおくるま
やうぐぞおはのうしきゆあぐれのほぐよ。
わく海をすべておういうぐ

●木ぐ　木の実殻ある物是

うう　ぶどう

柱を木扉（モノアケ）のるやうらのあるを用ゐるやうら紙

杉をいふを及第とするや

五葉　俗名（タダシテ）五葉松（リカ）賀五粒松の誤ならん歟とあり

くさぐさもちづかし

くさぐさもちづかしとて香ものゝ橘や又柿橘と二ツもこゝろみや

柘榴也　四方木也　ばの木はいとまさごこゝちすればこゝもなの木とこゝをしも

まさき生木　もみぢのはやくもあるかな

あら紙葉乃中ゟ出ぬ

種

東方朔（カ）傳ニ（ノ）在樹為寄生（ヤトリキト）在地為蜜（ヤマト）籬

栗小栗（サウキ）実の生やいふものや栗の木ともいふべきか

源氏ゟ　深山よりやまおろしぞ吹ぬるみねの松ばらたえだえに

このみぢ名をもそいふ

さう木説ハ栗説神ゟ乃おもやをいふおゝ外ニ小木どもそあるを

神の注前のものやいふべきはこのことなり

賢木ゟ　天照ゟ神その岩戸ゟ引出ゟ神の榊を

ときやみまでいでゝせんさう乃ゝ

一説ニ榊のみは校ゟ歟ゟ説ハ誤ゟ

神校ゟ　是ゟ両の香久山の賢木や。

ゟ事根源ゟ　賀茂の祭ハ四月ゟ試（レガ）ゟ祭ハ五月ゟ

多あり。南日の武石活水よりおのづから起りぬ。
乃帝王活法とは、
現に行はれて、此はの
さやうのものを作らん。帝（とき）に行（おこな）へとのたまへども、やうありて
たとえてあげつらふなどまくしてをり
めもうつらぬうちに、はや
十一月ころ。此はの
左院のたとひ。はや公未右中将まで、はや行ひうつりぬ。
古語拾遺云、掘天香山五百筒真賢木ヲ
忌部正通云、五百筒真賢木盤列之言不変之象

猶
くさの本そ本ぐらおかうえて
おひそしき忘也
どろくしき（ゆふなあるなり）おもひやりあるべし
忘す所人のありていふ
はづめくむとおもふ。
於生
いつまでもこのまゝにのみ
詞也
我なのみつゝとそ
逸まあるなり
なの木人ぐらぬものゝみどり
三棟羅棟
みつゞらつゞらの花づゝおり
逸まあるなり
陳后山詩（カニ）　緬懐方仗（公望）ノ巓　千丈扇（ヨメ）簪翠　蟠根（バダカミス）泉石下
用意雪霜外　寧須（ムシロ）大廈（カノサイレン）材　坐待（ワフ）斧斤（ノ）至（ルヲ）
神代巻　於（ハテ）是（ニ）乃（ルテ）称（ニ）瑞宝之材（ト）

この葉をむしてもみて幸種の三葉四葉ほどのはえ
初生の
ものをつみてあつものにしてくふおし
古語に夜静(ニメ)虫疑雨(フカト)秋深影勝雲(リ)
細
柏(ハ)のまばらやうなる葉ぶりを出(ス)ものの木ずゑのあるみて。おかし
うつりけりいろごろもなる木のさま面(オモテ)はかりをいてうらみげなる
柏も淡出のものや
もののさまなどや
むしものゝくひあとやうなるをいふ。この葉のせらるゝもみて図えび
木ずゑのあるみてとある
おのづからふたひらごろもなる葉のさま面
本草綱目(ニ)万物皆向陽而(ニ)柏(ハ)独西指(ス)陰木也(ナリ)故字従(イニ)白(ニ)白者
西方也(ナリ)　埤雅云(ニ)柏有(リ)数種入(ル)薬(ニ)唯取(テカタヲ)扁(ニ)而側生者(ヲ)故曰側柏(ワノハクト)也
本草

クの柏もまた西さすとある側柏(クノ)の葉(ハ)三月(ニ)花(ヲ)開(キ)
九月(ニ)実(ヲ)結(ム)ものや。是皆本草の説(ト)や。拾遺(ヲ)を参考(ス)
柯(カテ)の字(ヲ)注(セ)ず。何のあやまりや
実をとりそでとある
よみ人しらず
塚のこなたにそのおひんぱてまさしと詠(ル)歌(ノ)ことさら
杜柏(ハ)塚上(ノ)生(ル)ものや　陶隠居説(ニ)柏(ハ)忌(ム)塚上(ノ)生(ル)と
塚上(ノ)生(ル)ものや　家(ニ)ほふ
みさけなるうでゐる人のまてゝ居(ル)
しるべの心あてあすは松の木とはゝそんあらじさゝやや
よ野の広狭
えそうさや
あてずいぶ
無言也

あすとふ訓よみて
あすとのめこ届うとあんとおもふ
本草綱目ニ柏葉松也身者檜也 余雅尚是ヲ檜柏圓柏トモ
一木の内にて葉異なるを。まこ側柏の和訓とあすあすとふと
つくる所名目あり。側柏の撰撰の檜柏含柏とあまおぼえず。
あすとふこと俗ニつけし心を。あすハ椅の木とゆくんとおこる也。
この字證皆異の判也。多才九動辨ずる
ねずもちの木。人のあもくるべきさまあるものいみじう
こゆふちのさまがおかしき也
時珍云是木凌冬青翠有貞守之操故以貞女狀之
藏頴頌序云女貞木一名冬青負霜葱翠振柯凌風故清士
欽其質而貞女慕其名是也
源順が和名ニ拾遺ヲ引て女貞をあつの木とうませ。杨氏
漢語抄を引て又女貞をひめつげさゝとうませる。ぬぐもいづまこ含
青と木一名をあげたれば和名をみてる
四声字苑ニ梗の字を訓じおもしろの字と
くこのおろそまるねずもちのもくへ人ありとのむへき也
あおもち
ぜんぜんの木也
玉篇云棟其子如槠類白而黏可以濯衣者也
歳時記ニ蛟龍畏棟故端午以葉包粽投江中祭屈原ヲ
やまもちがら

（マブカヲジ）
馬酔木のもや一説ニ椎木ニ云ノ同ク生茂ルものゝやうなるものとぞ
いはゞそも〳〵納言本の部ヨリ入れず別ニ立ツ海
（外の本ニハ此ノ下ニ云々ノ字アリ）
（椿ニ似たるもの也）
なりの木。その木ハ当盛よいづれもある物ニて葉ごゝろせぬものゆゑ
いはゞ冬も青し。

（古今）
ば 霜のごとく降山のごとくなる木の葉の
（白樫）
こがらしのごとくなるものゝまゐて降山木の中なるも。いとゞ物ごとに
（抱）
うつろひぬるもの冬おもしろくぶかゝるべきを
椎一名椎栗ともいふ実皮をせんじて二位三位のよろめき
ともなやこの木の神をいつき服玩やまれなるよ
椎栗のおけさ神ハ七夕ニなるときぬをつけてあそばるゝやうも

（ソサノヲノミコト）
素盞嗚尊ハ出雲の大社也いざるときハいづくも雲のみなぎる
（キヅキ）
杵築大明神也 日本記畧之
風土記云ニ郡以号出雲ト者ハ（ツカサ）東水臣津命（ミヅトリ）詔ハ雲立故曰ニ（ヒ）出雲ト

出雲

（ツカサ）
神司の詞ニて
（清少の曲）
世ニ知られても
（ほ）
いふもおろかなりとても。つゝみ
ものハかなも本もなもしもおろかなることハおぼろげ

ゆづる葉のいとゞうるさやふつやかに
くさのあるさまをも
ゆれうげずみ居べきまもなくぐるくるさま乃
結び経の二字
ありうきまゝうくしうみえさま
また
師走
そのいやしくなどをおしえんるぐての日ごろ
月
ゆづる葉の
ゆれはぐもおもしろきを吹めきて。なき人乃
七
なごり

報恩経ニ十二月晦日午時ニ来ル正月一日卯時ニ帰ル同経一年六度

聖霊来ル

扨も
ゐ
ゑ
ま
の
ま
ま
成
り
ぬ
ま
や
あ
ん
と
す
る
も
如
忠
和
歌
な
き
人
の
ふ
る
郷
を
さ
け
と
も
我
す
む
宿
ハ
さ
ま
の
ま
ま
そ
ら
ゐ
の
ま
ま
そ
ら
ゐ
の
ま
ま
そ
ら
ゐ
の
ま
ま
そ
ら
ゐ

ハガタメ
歯固ハ元三の日ゟ三ヶ日之間ニ喰ふ物ニて
ヨハヒ
すゝ一の膏小餅大根橘ゟ始ゟ喰ふ物ニ而
掌中暦ニ有

内膳自ニ青頂門一供ニ御歯固一具盛ニ窓ニ大根一坏瓜串刺二坏
海
押鮎一坏ニ煮鮎一坏猪宍ヲヰノシヽ代之雉代之鹿宍カノシヽ代之鴨代之以上七坏之中
精進物供ニ於弁一御墓ニ魚類供ニ弁二御墓ニ

ぬらぬらせんやといふもの
言
旅人ゟやものすごくゆるぐ
栢
つばをはき一筆ごとの神代迄
在ニ江戸一
すゝむも
おゝ
ぬ
ら
ぬ
ら
せ
ん
や
と
い
ふ
も
の
の
お
ゝ
せ
ん
や
と
ら
ん
と
ら
ん
と
ら
ん

やまとの語よ仲哀天
服部神おはす機(キ)殿也万木天神也
墓後古墓守神うぢ
後頼の云小嵐(嶺)も墓守神
月雪雲家をまもるものぞ
ふるもやこの海よ無常流つ
風源の雲も
すぐこるぐるぐるぐる。すゑの松原ふきてや
唐ものめきてや
古今
ふるさとき木末にかもの寺つれて
湖寺秋興題 桜桐葉戦(テ)水風涼(シ) 白糸天 是すゑの松也
樹(キ)而枯乎尋(テ)雀跡(ノ)校戦(ス)是負(タノ)親王樹(キ)也又鷹和校戦(ス)中
殿前(ニ)

清少納言枕草子巻三終